

## 〔畜産〕

## 豚の雑種利用に関する試験

落合 巖・重永錦二・佐藤 勲・甲斐勝利

(宮崎県総合農業試験場肉畜支場)

OCHIAI, I., SHIGENAGA, K., SATO, I., and KAI, K.

Experiment on the hybrid utilization in growing finishing pigs

## まえがき

一代雑種およびそれらを母体とした雑種利用で、産肉性の向上に資するため最後の交配に使用する種雄豚の品種を明らかにする目的で、当場において43年度までに実施した1区6頭以上で、年度、季節、性による影響を除外した8区分の試験成績について報告する。

## I. 試験材料と方法

## 試験区分と供試豚

区 分	頭 数 (性別)	母 豚 名 号
L・W	14 (♀7, ♂7)	L-160, L-2500
L・H	8 (♀4, ♂4)	L-2155, L-6519
YL・W	8 (♀4, ♂4)	37~18 YL-1
YL・H	8 (♀4, ♂4)	YL-2 YL-4
BL・W	10 (♀5, ♂5)	BL-2 BL-3
BL・H	22 (♀11, ♂11)	BL-1 BL-3 BL-2 BL-4
LH・W	10 (♀5, ♂5)	LH-119, LH-120
LW・H	6 (♀3, ♂3)	LW-103, LW-104

試験方法は、豚産肉能力検定実施要領にもとづいて実施した。試験区分と供試豚は表のとりの8区分であり一代雑種におけるH種の種雄豚と三元雑種において、最後に交配しているH種はすべて同一種雄豚であり、またW種については、L・W区の14頭の供試子豚のうち8頭が異なる父豚で、その他のW種は同一種雄豚である。

## II. 試験成績

発育と飼料の利用性についてみると、体重20kgに達する日齢ではLW・H区の63日、BL・W区の64日が良く、一番悪かったのはYL・H区の81日であった。90kgまでの到達日齢では、YL・H区、YL・W区がともに181日で良く、悪かったのはLH・W区の191日、LW・H区の193日、L・W区の196

日であった。20~90kgまでの1日平均増体重は所要日数の少なかったYL・H区が699gで最も良く、BL・H区の657g、L・H区の655gが続き、悪かったのは、BL・W区の586g、LW・H区の563g、LH・W区の550gであった。

この傾向は飼料摂取量、飼料要求率についても同様の成績であり1日平均増体重のよいものほど飼料摂取量が少なく飼料要求率も小であった。中でもYL・H区の3.16の要求率は注目される値と思われる。

と肉成績について見ると、背脂肪層の厚さでは、LW・H区が1.4cm、またYL・H区は1.6cmとともに薄く、肩部、背部、腰部の脂肪層の三部位においてもYL・H区、LW・H区の2.4cmが最も薄く、次にL・H区の2.7cmであった。枝肉を三分割した場合のハム割合ではL・H区、YL・H区、LH・W区、LW・H区の4区はいずれも32%でありハムの割合が大であった。枝肉中に占める筋肉の割合をみると60%以上を占めたものはYL・H区の68%、L・H区の65%、LW・H区の64%であった。ロス断面積はYL・H区の22.6cm<sup>2</sup>が最も太く、ついでLW・H区の22.0cm<sup>2</sup>、L・W区の21.5cm<sup>2</sup>の順であった。絶食体重に対する赤肉量の割合では、YL・H区が46.5%と絶食体重の半分近くが赤肉であり、ついでL・H区の43.0%、LW・H区の41.5%、L・W区の40.7%の順であった。

## 要 約

LおよびLを片親とした一代雑種母豚にW種およびH種を交配し、産子の発育、産肉能力について調べた。

その結果、発育および肉質の諸形質について総じてH種を雄として用いた交雑型が優良であったが、その交雑方式については純粋種豚の閉鎖群育種を行ない更に検討を加える必要がある。